

第7回安佐薬剤師会学術大会

～新たなる絆を目指して～



こちらの写真は、学術大会終了後に撮られた会員集合写真です。
新たな絆の始まりだと感じています。

平成 27 年 2 月 15 日（日）

安田女子大学にて、安佐薬剤師会学術大会が開催されました。

文部科学副大臣である藤井先生の特別講演から始まり、安佐薬剤師会会員の発表、安田女子大学教授による講演、そして実務実習生に対する集合研修の概要と続きました。

題目が多いため、今回は特に印象に残った内容に対して書かせていただきます。

安佐薬剤師会では、6年制薬学部薬局実習の期間に学生を集めての集合研修を行っています。蔵本先生の発表後の質疑応答を聞いたところ、安佐薬剤師会独自の事のように、インスリンや吸入剤、小児科用剤、調剤報酬、漢方調合、学校薬剤師、薬物乱用など一薬局で実際に体験できないかもしれない内容を、薬剤師会で集合研修を通してフォローするという内容です。

蔵本先生、また会長である下田代先生を中心に、それぞれの得意分野を会員薬剤師が分担して講義を行います。

集合研修は少しお手伝いをさせて頂いていることもありますが、指導薬剤師達は皆さん全力投球です。そもそもなぜここまで全力で指導しているのでしょうか？

その理由の一つに、現状の薬剤師に対する危機感があると思います。

藤井先生の話にもあったように、これから必要となるのは「薬剤師業務の見える化」です。

医療における薬剤師の必要性が一般の方達により伝わるにはどうしたらいいか。

その一つが薬剤師教育にあると思います。薬局単体で教育することより、集合研修でより多くのこれからの薬剤師達を教育することは、大変やりがいのある事です。

そしてそれがこれからの薬剤師達の底上げにも繋がります。

こういった熱い思いをもった薬剤師達の新たな絆が、この集合研修を通して構築されているのではと感じています。

また、受動的な講義だけでなく、SGD（スモールグループディスカッション）を通して能動的に生徒が学ぶ体制の構築も、結果的に学生の学習意欲の向上につながり、双方の実習へのやりがいとなっているのではないのでしょうか。

そして最後は、雄鹿原診療所所長である東條環樹先生の特別講演でした。

題目は「これからは在宅医療！～それを実現されるための他業種連携」です。

「2025年問題」に対して医療関係者を始め、おそらく漠然とした問題意識は多くの人を持っていると思いますが、では具体的に何かをしているか？と自問自答することがあります。それらの問題に対して、東條環樹先生の実際行われている大きな行動に関しては、ここでは控えますが、

僻地医療を通して、地域社会の抱える課題をみつける想像力。

それらの課題に対して正面からアクションを起こす行動力。

新しい決まり・形に対しての「抵抗」を、最終的に「やりがい」に変化させた実行力。

皆を引き込むユニークな人間力。

これらあらゆる事を今回の講演で感じる事が出来ました。

実現されている方の絶対的な自信にも、個人的にですが大変共感が持てました。

これから私たち医療人の、地域において進むべき形の一つを示してくれる内容でした。

自分たちの実際働いている地域で行われている医療を身近に感じる事が出来る事が、安佐薬剤師会学術大会の意義の一つだと感じます。

安田女子大学の学生による発表の機会、安佐地域における医療の現状の把握、安佐薬剤師会として現状行われている内容の発表。

一薬局や一病院、ましてや薬剤師個人としての考えに止まるのではなく、実際行動できる地域という枠で、新たな一つの絆を通して、自分たちがこれから出来ることの方向性が今回の学術大会を通じて見えてきたような気がします。